

#### 四 仕事と暮らし向に関するもの

##### ①世ど作ヨドツクい

五風十雨というように、天候に恵まれねば、いくら精出しても豊作は期待できない。

##### ②細手フマデの一倉イチクラ、荒手アラデの二倉ニクラ

儉約家の一倉分の物量は、濫費者の二倉分の物量に匹敵する。

##### ③手ぶりテブりど富者オチユ

手ぶりⅡ「手群れ」か。人手の多いこと。人手がそろって働けば、それ程富が得られる。

##### ④粟オの草は愠リン気者キヤムに為シみり

粟の草Ⅱ粟の除草又は間引き。粟の種子は粒が小さいので、厚時になりやすいから、密生した所は思い切って間引かねばならぬ。ところが気の小さい者はそれができかねるから、愠気の強い女にさ

せたら勇敢に思い切って間引くだろう。と。

##### ⑤貧乏ヒンバし居る間は粟作り

粟は肥料を多く要せず、早魃にも耐へ、その上貯蔵が利くから。

##### ⑥麦ムギは諸作シヨサクの大兄オヤヤ

麦はその年の諸作の中で第一番目に収穫できるから、又麦の豊凶によって、その年の諸作の作柄がわかるとも言われている。「麦は作ツクいの親ウヤ」も同じ。

##### ⑦主ヌど大工

家屋を建築するには、家主の設計、指図が大きな働きをする。

##### ⑧大工テウの他人タニ為タメ

大工は、他人の家は造るのに、自分の家の手入れは捨てておく。

##### ⑨腕ウデど曲尺カネイヤ有る

腕の冴えた大工は曲尺を使わずとも正しい寸法をはかる。線を引く。その腕前の自信を自ら誇る時に言う。転じて大工仕事に限らず、外の仕事の場合にも言う。

##### ⑬且那シメスの奉公シムスは為過シメスぎは無ン

主人の為には、懸命に働け。又「親の奉公と旦那の奉公は為過シメスぎは無ン」とも言う。

##### ⑩一芸ヒツは身の助け

一芸一能を持つておれば暮らして行ける。

##### ⑭若ワカさ有アいイにニの難儀ナンギは買ホうウてイもモ為シり

若い時の難儀苦勞は、我が身のため。

##### ⑪六十ロクジウの手習テナラヒ

年をとってからでも、知能を磨くことにつとめる。

##### ⑮辛シム勞ラウに空カラ辛シム勞ラウは無ン

働けば必ずそれに酬いられるものがある。

##### ⑫六十ロクジウなニてイかラ自ド身ウし自ド分ウの前メ為シん

昔は貧乏な者が金穀で売られ、その利息として主に奉公する。元金又は元米を返済するまでは、その主家から出ることはできなかった。

##### ⑯稽古キコに下手テマシ無シ

普通に言われるそのままの形。

##### ⑰砂糖サトウ黍ジは自ド身ウし自ド身ウの体カラダ持テちゆン

しかし六十歳になれば解放される慣例となっていた。又藩政時代は、十五才から六十才まで夫役の対象であったので、この六十から自分のからだとなって、一戸を構えようと精出すこと。略して「六十からどう自前ドクメ」ともいう。

フウジ、フウギⅡ甘蔗サトウ、荻アシの類であるからこういうのか。この島は至って燃料が乏しいので、製糖をするのにその搾りがらの茎も外皮も悉く燃料として、砂糖に焚きつける。それで「他人に頼ることなく自活せよ」と訓える時によく言う。

⑱ 明時貧乏

暁に早起きはするものの、働こうとはしないで、茶をのむ、煙草を吸う、すればそれだけ損だと、このような人を嘲って言う。

⑲ 持つち生りたる貧乏でいちは無ん

生得の貧乏というものは無いから働け。

⑳ 貧乏者の貧樂

貧乏になれきってしまうと大家の者のような心配がなくて暢気だ。

㉑ 暁 月は童ニザ逃んじやしゆん

ニザは下男下女の称。雇よりも下の意を持つ。夜明け方に月が照っていると主人が「それ、夜が明けたぞ」と、叩きおこすので、年少の下男下女は居堪らずして逃げだす、と。

㉒ 元銭商は上商

元銭を欠かねば上乘の商売だと、儲けなかった時の気休め。

㉓ 売てい悔み 買ってい悔み

売ってしまったって後悔することもある、買ってから後悔することもある。

㉔ 銭金の廻い物

「金は浮世の廻り持ち」などと同じ。

㉕ 算用者の銭足らぎ

「算用合つて銭足らず」などと同じ。

㉖ 家の富でいちは無ん

いくら立派な家屋でもそれは固定していて、運転資金とならないから、財産を産まないとの意。

㉗ 大木は倒りてい半ら

富豪の家は財産が傾いても、なお余勢をもつて生活ができる。

㉘ 船一艘が荷貰うゆか、一人人が口減らし

家族の多いのが貧乏の種子

㉙ 病疲りは家倒り

病人死人が出るほど家を疲弊させるものはない。

㉚ 有には有い喰れ 無には無の暮し

有れば有る、無ければ無いで、くよくよせず暮らしていいこうぞ。

㉛ 天道ち口開ちゆん

食う物が何もない有様

㉜ 安物買うやの高当い

「文惜しみの百失い」などと同じ。

㉝ 船持ちは乞食に笑らゆん

クンチャは「乞食」であるが、この言葉は元々本島のものではないようである。普通にはムヌムレ「物貰い」、「フジチ」は癩患を言う。

㉞ 海山拍子な物

海の漁、山の猟必ず獲物があるとは、決まっていない。

㉟ 海歩ちガツテ 家喰れ倒しや

ガツテは物事に熱中する。夢中になる。漁の好きな者は、家業を抛って海にばかり入り浸っているから、しまいには家までつぶしてしまふ。と、この島では魚業を専業とする者は殆んどないといつてよい。多くは好き道楽で釣りをするのであるからこう言うのである。

㊱ 海歩ちヨーシャは猫のサブレも食みん

ヨーシャはひもじいこと。サブレは残飯、食への

こし。

海に行けば腹が空くので、何でも食べる。

## 五 身体、容姿に関するもの

③7 ヨーシヤにニツチャンの物は無ん

寒さに汚さの物は無ん

ニツチャル食のまじいこと。「ニツチャニツチャ食べるな」などの「ニツチャ」。

ひもじい時は、食を選ばず、寒い時は衣を選ばない。

①木にも絹巻きは清さ

チュラサ、キュラサ「清らさ」で「美麗」の意に用いる。

「馬子にも衣裳」などと同じ。

②按司の子は生い出ち、クジの子は生い後り

按司「琉球における大名格、ここではただ「良家」の意。

③8 チューホーは道端にて為り

チューホー「布を織ること。又は織女」。

道端で機を織れば、道行く人が見て、いろいろ指導をするし、技も上達するから。

クジ「意不明、但しここでは「下賤の者」の意。

良家の子女は、成長するにつれて、ますます気品が出て美しくなるが、下賤の者の子女はたとい美しく生れたにしても成長するにつれて醜くなる。

③9 醤油は道端に立ていり

醤油は仕込んだら、絶えずかきまわすのが良いとされている。道端であれば、通りがかりの人が立寄って話をし乍らでもかきまわしてくれるからである。

③目 窄男上男、目張や女の上女

男は糸眼をした男、女は鈴を張ったような大きな目玉をしたのが美しい。

④大さぎタロシヤ出ち揃てい美さ、丈低く美さはチヂてい美らさ

ギタロシヤ「構えの大きいこと。チヂてい」一人だけ離れての意か。

右二つとも平常の話ことばには出てこない。又俚諺としてここに取り入れたけれども民謡の形そのままである。

意は、男女を問はず、身体の構えの大きな者は揃って歩くのが堂々として美しく、小柄な者は一人歩きの方が美しく見える。

⑦ぐわんない百歳

日頃頑健な者はハタと瘧れることもあるが、蒲柳の質が、よぼよぼしながらも長生きをする。

⑧尾太は牛ビル、足太は人ビル

ビル「弱いこと、柔いこと。尻尾の太い牛は弱い。人は足の太いのは強健でない。

⑨年寄は物の力

老人は栄養を取らねばまいってしまふ。

⑤赤子の顔は七面変ゆん

嬰兒の顔は、父に似たり、母に似たり幾度も変貌する。

⑩一寸坊の五分魂

小男が却って才智は富んでいる。

⑥イング為ゆる時は味憎盗人惚りらしゆん

イング「幼児が大人の言葉に応じて、ウンウンと出す声」。

幼児の可愛い笑顔を見ると盗人に入った者までもうっとりなつて盗みを忘れる位だとの意。

## 六 雑及び前の部類に入れるべき補遺

①丑ぢ人の大トウルバイ

丑ぢ人「丑の年生まれの人。トウルバイ」とぼけること。

丑年生まれの人には牛のようにのろみである。

て食うから一生貧乏をする。

【備考】

以下、十二支に因んだものは、十二支の動物の性情などにくつつけて言うのみで、何れも深い根拠があるわけではない。

⑤亥<sup>キ</sup>ち人の居喰<sup>キイ</sup>れ

亥の年生まれの人には物に恵まれ、一生楽々として暮らせる。但しこれは「亥」の「ゐ」を「居」の「ゐ」に附会したもの。

②寅<sup>トウ</sup>でい女は夫食<sup>フウトク</sup>みん

寅年生まれの人夫を食い殺して早死させる。

⑥敷<sup>ハミ</sup>居は親の面<sup>オモ</sup>

ハミ＝鴨居の訛であろう。本島では障子などの建つシキキをこう称している。

これは迷信として根強いものがあり、一般に寅年の女は結婚問題に悩まされる。尤も相手が寅年の男であればよいという特例はあるが、その代り「丙午の女」は別に嫌われていない。

③申<sup>サ</sup>でい人の物サ<sup>サ</sup>ーサ

物サ<sup>サ</sup>ーサ＝心がザワザワしておちつきのないさま  
申年生まれの人には早合点で奥深い思慮がない。

ハミは親の面と同じく尊いものであるから踏んではならぬとの戒。これを神聖視して、神事の際にはその一隅に御洗米を供える風習がある。「神」も「ハミ」であるし、この言葉の共通から来ているのであろうか。

④酉<sup>トウ</sup>ち人の搔<sup>ハ</sup>ち喰<sup>グ</sup>れ又は「拾<sup>ヒイ</sup>喰<sup>グ</sup>れ」

酉年生まれの人には、鶏のようにその日をかき拾つ

⑦七<sup>ナナ</sup>落<sup>オウ</sup>てい口の水汲<sup>ミ</sup>でい「アングシヤリ」願<sup>ニガ</sup>為<sup>ゲン</sup>ゆん  
七落<sup>オウ</sup>てい口＝川水のおち下る七つとところ。  
アングシヤリ＝藩政時代の薩藩役人の妾。

七ヶ所の川水の落口から浄水も汲んで神に捧げ、

アングシヤリに取立てられる願をするというのである。当時薩藩から代官役人として下ってきた者をトウシガナシ（殿がなし）と呼んでいた。これらの役人はすべてが単身で下ってきたのである。

⑨秤<sup>ハ</sup>に掛<sup>カ</sup>きれば桿<sup>ソ</sup>と折<sup>ヒ</sup>りゆる

似た者同士が、喧嘩などをする時に、冷笑してこういう。

従って、その駐在二、四年の間その空閑を慰め、薪水の労をとらせるため妾をおくということは珍しくなかった。それが即ちアングシヤリであり、

⑩妻<sup>トウ</sup>は貸<sup>ツ</sup>すとも砥<sup>ト</sup>石<sup>イ</sup>は貸<sup>ツ</sup>すな

トウジ＝トジ（刀自）であろう。

そのおめがねに叶ってアングシヤリになれば殿がなしの妾として尊敬せられるばかりか賦役は免れる。家屋田畑までも与えられることがあるので、島の女（良家の子女ではないが）はアングシヤリになることを神にかけて願ったことをこの俚諺は物語るものである。

他にいくらでもあるのに「トウシ」と言ったのは「歳<sup>トウ</sup>」と相通ずるから寿命を縮めるといふ縁起からも来ているのではあるまいか。

⑧キ<sup>チ</sup>儀<sup>イ</sup>と酔<sup>ユ</sup>狂<sup>キヤウ</sup>は二人<sup>ニ</sup>賽<sup>サイ</sup>台<sup>ダイ</sup>らねいは為<sup>シ</sup>ららん

キ<sup>チ</sup>儀<sup>イ</sup>＝柘<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>が足らず口が括りにくい儀。

⑪猫<sup>ネコ</sup>は飼<sup>カ</sup>うよりハブ<sup>シ</sup>

ハブ＝好餌をもつて手なづけること。

ユ<sup>グ</sup>リ<sup>リ</sup>酒<sup>シウ</sup>を飲<sup>ム</sup>んでの喧嘩、又は乱暴。  
柘<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>の満<sup>マン</sup>ちた儀<sup>イ</sup>は一人で縄が掛けられるけれど、キ<sup>チ</sup>儀<sup>イ</sup>は二人がかりになる。それと同様に、相手のないユ<sup>グ</sup>リ<sup>リ</sup>はできん。

猫は飼うとうるさいから、近所の猫を手なづけてネズミを捕らせるのがよい。

⑫猫<sup>ネコ</sup>と童<sup>ドウ</sup>は人<sup>ヒト</sup>の肝<sup>カン</sup>見<sup>ミ</sup>ゆん

猫と童とは良く人の心の底を見抜くから、馬鹿にはならぬ。

⑬馬は人腹、牛は鬼腹  
腹は血筋を引く者の意。

馬は賢くて主人の恩義も知っている。又色慾も盛んであるから人の血をひくもの、牛は愚鈍である。しかし一旦激すると角を振りたてて主人でも突き殺すから鬼の血を引いている。

⑭犬の歯の蚤

犬の歯では蚤はなかなか捕まらない。「宝くじ」のようなものがそれである。

⑮犬の七月廻い

犬が忘れた頃に、またひよつこり顔を見せる。人が時たま訪ねて来る時に「こうい。

⑯犬の七立廻い

犬は同じ所を日に何度でも廻ってくるものである。

⑰算勘碁魂

算勘（主に珠算）や碁、将棋の特殊な才能をいう。「算勘算勘馬鹿のうち」というのもある。

⑱唐馬の角

希代の珍品という意。角のある唐渡りの馬がある筈はないから。

⑲昔はムツカイ、今はナーマイ

ムツカイ、ナーマイは普通の言葉にはない。ムカシ、ナマと語頭の同じものをもってきただけ。時代が変われば義理人情も自ら異なるといふことであろう。

⑳三年漬けたるラツキョの漬物

主婦の世帯持ちの上手なことを誇る言葉、余程細心な主婦でなければラツキョ漬を三年も貯えることはできない。

㉑八セマグ 七マツカイ

る。人が同じ家に再三やってくる時に「こうい。

⑳立ていば踊

祝の座などで、踊らせようと引張り出す時に「こうい。

㉑二、三の振舞い

振舞い饗応  
本膳、二の膳、三の膳と出てくる一番の大振舞い。

㉒昼提灯つけて嫁貰れが

昼提灯をつけて嫁貰れに行くという習俗はないが「男よりも一つ年上の相手は昼提灯をつけて探してもいない」という僅諺もあるから、三国一の花嫁御を採す、ということである。

㉓大木の元は倒りて半ら、黒縞衣裳は肩落ていてい半ら

藍染紺地の着物の保ちの良さを愛でていう。

セーグマール小さな竹筴

マツカイはうどん茶碗大の器  
大食する者を冷笑していう。  
八セマグの味は甘藷

㉔キーぬホンカ七戻し

キーぬホンカは仕返し、キーは「ゆひ」（結ひ）である。

人から悪さをされて、仕返しをする時にいう。例えば友達が尻をつねったら「キーぬホンカ七戻しだぞ」とつねりかえすように。

㉕一ちんちやぬ豆の皮

「一つしかない豆の皮」となる。一枚きりの晴着、一張羅をいう。

他の穀物は、二、三枚も皮を被っているが、豆はただ、一枚の皮を被っていることから言っらしい。

㉖酒と諸白は身の薬

諸白はみりに似た甘い酒

「酒は百薬の長」と同じ。

②9 死に宿は貸すとも子産し宿は貸すな

死人の葬いの宿は貸しても、お産の宿は貸すな、ということ。死人は預つてもすぐ立て行くので後に迷惑が残らないけれども、お産となれば産後の静養に長引くからだという。また、お産の宿を忌むのは「お産があるとニライの神（竜宮の神か）が子供に位をつけにくるという伝説があるし、自分の家の「位」を奪われるということからも来ているのではなからうか。一説に「産の不浄は重いから」とも言うが、昔から「血不浄は軽く、死不浄は重い」と言われているから当らないようである。

③0 常々腐ら

平常、いつも綺麗な晴着を着てのららしている者を嘲笑して言う。「常々汚れ」も同じ

③1 女郎呼びやの焼物買うや

島から沖繩へ、仔牛などを売りに行く若者共が、

懐に金が入ると那覇の辻の女郎屋に入り浸って散財をなし、帰りの土産には安物のカメラやツボなどの焼物を持つてくるのがお定りで、これから出たもの。

③2 ウジョシヤも十品

ウジョシヤ＝目から鼻へ抜けるというように、かしいこと。  
このようなかしい者にもさまざまあって、人々により、何か一つ二つのことでは「あの者がどうして、こんなことをするのだらう」と、いろいろな時にいう。

③3 身は強かれ、衣は弱かれ

着物を縫う時に念ずることば。身体が着物に負けないようにと言うのであるが、本土から伝つて来たそのままの言い方である。

③4 短か袖には余る、長袖には足らじ

「帯には短かく、襷には長し」と同じ。

くるとの戒め。

③5 大袖に縫ら

「寄らば大樹の下」と同じ。

④0 ハナラサぬ者はサビ汁食まぬ

ハナラサぬ者＝俐巧に立ちまわる者。

サビ汁＝実のない、まずい汁。

俐巧に立ちまわる者は貧しい暮らしをしない。

③6 草履は小草履、下駄は大下駄

小草履、大下駄が履心地良い。

③7 大釜の飯、小鍋の汁

それがうまい。

④1 章魚は自分し自分の手食みん

一つの仕事をするのに内部の者が私利をはかって、しまいには自分が立ち行かぬようになること。

③8 下戸の建ていたる倉は無ん

これも普通に言うそのままの形。「身は強かれ：……」以下何れも近代に他から入って来たのであろう。

④2 糞の前にも手出じやしゅん

利慾の前には恥も外聞も構わない。

③9 イングワ持ち者は糞にも頭つきり

イングワ＝イング（前出）する頃の幼児ということであろう。

④3 眠とうぬ子起しゅん

平常心でいるのに、外の者がとやかく言つて、その心をかき乱す。

④4 哀り為る間は醬油造り

アワリ＝貧しく暮していること。

醤油は醤油そのものだし、殻も食えるから。

④<sup>シエス</sup>巢拔ぎアママになゆん

アママⅡやどかりのこと。成長するにつれて、小さい殻をすてて大きい殻に入る。家を失って寄るべなくなったことを言う。

④<sup>フイドリイ</sup>大鳥飛ばちゃん

「足元から鳥が立つ」驚きがあった時に言う。

④<sup>ア</sup>アマク、ウシニヤ

アマクⅡしばらく、一寸の間

ウシニヤⅡある女の名「おしな」の訛

根気が続かず、すぐに仕事を投げ出す者に言う。

所持していたのであります。ところが先頃奄美郷土研究会の島尾敏雄氏より同会の研究会報に何か寄稿をどのお奨めを受けましたのでこの旧稿を載せて頂くことになったわけです。

俚諺集は、玉江、安藤共編となっておりますが、その大部分は玉江氏が書き集めてあったものです。氏は三十有余年の間郷土子弟教育に専念、昭和十七年（一九四二）三月、名瀬青年学校長を最後に教壇を去り、退耕、晩年を送っておられました。昭和二十八年二月享年七十才を以って他界せられました。

いまここにわが島の俚諺を広く紹介することは故人の意志に副うものと考え、あえて本誌を拝借することにした次第です。

昭和三十五年一月二十日

安藤佳翠

付記

この俚諺集は、編集を終った当時、即ち昭和二十七年（一九五二）に三部を複写にして、その一部は柳田国男先生（民俗学者）に贈呈、残りの二部は編者おのおのが